

《論文》

神の國は斯くのごとき者の國なり ——公立小学校教員としての歩み（その3）——

佐々木 正

1. 3回目の教員採用試験

所属教会では日曜学校分校教師を経験し、大学で初等教育を学び北区の小学校で2年、へき地小規模校の教師としての6年が過ぎました。私としてはこのまま分校教師を続けることに問題はありませんでした。しかし、当時勤務していた千葉市では一校勤務は7年以内という方針が示されていました。また、県自体でも小規模へき地校が減少している時代でもありました。6年間勤務の中で、千葉市内には私の勤務していた学校と隣の学校、合わせて2校に分校がありました。国道沿いにあった隣の学校の分校は廃校となり、子どもたちはバスで本校に通うようになりました。残念ではありましたが市内での分校異動は考えられなくなり、先の進路を改めて考えなければならない状況になりました。

そして、祈り続けた末、再度東京都の採用試験を受験することにしました。大学卒業後東京都、千葉県、東京都と3回目の採用試験です。さらに学びたい、挑戦したいという思いが最も強かったからです。

分校では子どもたちの「わからない」というつぶやきが聞こえ、教師の学びの大切さに気づかされました。また、学校生活を送る中で意図的、計画的な指導の周縁にこそ、豊かな指導の機会が存在することを経験しました。その中でも最も大きな学びは、子どもたちの持っている好奇心の強さ、支え合いたいという心の広さを実感できたことです。イエスさまが子どもたちのようにならなければ、天国には入れないと語られた意味の一端を実体験できたことは大きな喜びでした。立教大学で学んだ意義はここにある

のではないかとさえ思うほどでした。これまでの経験を通してさらに学びを深め、子ども同士が共に手をつないで歩む教育の実践に挑戦してみたいと考えるようになりました。

再度の試験合格後、赴任先の連絡はなかなかありませんでした。そもそも分校教師としてあと1年勤務はできます。しばらく間が空いてしまった採用試験のため、この年の受験は腕試しの思いもあり、合格通知をいただいた後の決定に関しての焦りはありませんでした。また、それまで夏季休業期間中に千葉県が開催していた特別支援教育の研修を5回受けており、あと1回研修を受けて試験に合格すれば特別支援学校教諭免許が取得できるまでできていました。もし万が一採用校が決まらない場合は、残りの研修を受け免許を取得し、次年度、再受験するのもよいかと考えていました。

3学期も終わろうとした頃届いた神さまの導きは、特別支援学級の担任という道でした。特別支援学校教諭免許取得を目指していた私に、あとは現場で学びなさいという神さまの計らいのように思えて信仰をもって受け止めました。分校の子どもたちや保護者、地域の皆様、6年間で心を通わせ、親しくしてくださった多くの方々との別れは大変つらいことでしたが、皆さんが私の新たな挑戦を応援し送り出してくださいました。お別れの会の席上、隣になった保護者の方に「佐々木先生はクリスチャンですか。」と聞かれました。私が「はい。」と答えると「やはりそうでしたか、こんな不便な場所に来てくださったこと、そして東京で障がいを持つお子さんの教師になると伺い、そうではないかと思ったのです。」と納得したというようにつぶやかれました。分校教師になることも、障がいのあるお子さんを受け持つこともキリスト者教師としての私の希望ではありましたが、それが叶うかどうかを自分で決定することはできません。保護者の方の一言で背中を押されたように思い、改めて神さまの導きに対して深い畏敬の念を覚えました。

2. 東京都の特別支援学級へ

(1) 特別支援学級の概要

再度の東京都採用試験合格後、赴任先は文京区にある区立小学校の特別支援学級担任という辞令をいただきました。全学年3学級という当時としては平均的な規模で、特別支援学級が設置されていました。都会の中心にある学校で校庭も土ではなく、コースラインなどもきれいに引かれ、初めて足を踏み入れた時は分校との大きな違いに一瞬戸惑いました。特別支援学級は1年生から6年生まで多い時で12、3名程度の子どもたちが在籍していました。担任は学級主任と私、経験豊富な講師の3名で最初の一年が始まりました。

障がい児の指導に関しては、6年間の分校教師生活の中で夏季休業中に5回の特別支援学校教諭免許取得講習を受けていましたが、講習では実習は含まれていませんでしたので、担任として子どもと接するのは初めての経験です。当然不安はありました。これまでの学びがこれから出会う子どもたちにどれだけ役立てられるかは、やってみなければわからないことです。それは健常児への指導と全く同じです。私が教えるものを持っていて、子どもたちに効率よく伝える、わからせるということが教師の仕事ではないことは、それまでの経験から分かってきていました。それでも、健常児中心の公立学校では学びのガイドラインが存在し、おおむね進む方向は決められています。しかし、障がい児の教育については、一人ひとりの状況を理解した上でのカリキュラムの作成が必須です。そのため、学級主任と講師の先生からの話を虚心坦懐に受け止めることから始めました。

学級主任は前任者の異動に伴い、後を引き継がれた方です。穏やかな語り口で子どもたち一人ひとりの長所と課題をきめ細かく把握しながら指導を進める方でした。講師の先生は障がい児教育のベテランで、一人ひとりの子どもに対して常に温かなまなざしで指導にあたられていて保護者からの信頼も厚い方でした。

教室は普通教室の1.5倍ほどの広さがあり、机といすは、高学年用は常

時定まった位置にありました。低学年用は給食などの時は定位置が決められていましたが、活動に応じて机の位置を変更していました。教室の後ろ半分程度にはカーペットが敷かれたコーナーがあり、簡単な室内用の遊具などが置かれていました。その周りに置かれている棚には、教育用玩具、ゲームセット、音楽道具などが収納されていました。教室の隣には特別支援学級の教員室がありました。マジックミラーが設置され教室での子どもたちの様子がいつでも見られるようになっています。教員用の机、真ん中に大机、周りにはキャビネットがあり様々な指導関連の書物、教室運営に関する書類などが集積されていました。学校全体は空から見ると校舎はカタカナのコの字型となっていて、間に校庭があります。特別支援学級の教室は脇に出た1階にあり、独立性が守られた位置にありました。室内での音楽や体操などの少々音が出る活動も他の学級に気兼ねなく実施できるよう工夫されていました。また、校庭へもすぐ出られ、体育などの外での活動、緊急時の避難など安全に配慮された造りになっていました。

(2) 教師の協働

年度の開始、2階にある職員室で全教員が集まり新任教員の紹介、校長の学校経営方針の伝達、その他もろもろの年度当初の打ち合わせが行われました。全体での会議の後、特別支援学級児童一人ひとりの交流学級の教員との顔合わせ、簡単な打ち合わせを行いました。その後、学級の職員室で主任との打ち合わせをし、一人ひとりの子どもたちの様子についてより詳細な話を伺いました。全児童が交流学級を指定されている中で、障がいの程度に応じてどの教科でどのような交流が可能かどうか、前年度までの状況をもとに今年度の取り組みをどうするかという計画を教えてくださいました。特別支援学級の担任の仕事の奥深さに改めて気づかされました。

今までも担任一人で教育を行っているわけではないことは、分かっていたつもりでした。初めて勤務した学校で5、6年担任の際にも、4学級の担任が連携を取って仕事をしていくことの重要性については十分感じてい

ました。特に初任者としての私にとって、実際の学校生活のモデルは自らが受けてきた学校教育の記憶と、教育実習の経験だけしかありません。大学での学びの範囲を越える学校のあり方、しかも一つとして同じ学校はなく、それぞれが個性的であることは頭ではわかっていますが、一方では大きな不安を抱かざるを得ません。そんな中で私にとって幸いだったのは初任の学校での学年主任が教育実習の指導教員であり、人として教育者として尊敬する先生であったことでした。そのような先生の学年経営でしたから、学年教員一人ひとりの個性を重んじ、適材適所の役割をいただきながら2年間を過ごすことができました。

また、教師4人だけの分校での6年間も、一人ひとりの教育に対する創造的な取り組みを可能にするものでした。すべてが4人の相互信頼、協力、助け合いがなければ、分校教育の進展を図るわけにはいきませんでした。100年の歴史を持つべき地の分校として本校の管理職、教員以外にも、保護者、地域の人々の応援で学校教育が成り立っていることは様々な行事や出来事の中で思い知らされていきました。特別支援学級においても学級だけでなく全校の教員同士、そして保護者との協働は、この子たち一人ひとりの日々の成長に欠かすことのできないものでした。

(3) 子どもたちとの出会い

子どもたちとの出会いは1983年4月の始業式でした。子どもたちは概して人懐っこくすぐに遊び相手になることができ安堵しました。子どもと一緒に来校した保護者の方々にもお会いしました。すべての小学校に特別支援学級が併設されているわけではありませんので通学範囲は広く、送り迎えはほとんど全児童の家庭が行っていました。一人での通学は学校の近隣に住まいのある高学年の児童一人だけで、気持ちが安定しているときにはほぼ問題がない子どもでした。多くは母親が送り迎えをしていました。一緒に登校した時に母親から、今朝の体調、気分の様子、今日一日気をつけてほしいことなどを伺います。迎えの時にはその日の学級での活動、情

緒の安定、その他特記事項を担当が書いたノートを渡し、次の日の朝、そのノートに子どもが下校してからの家庭での様子を保護者が書いて担任に渡します。ノートのやり取りは毎日行われますので、担任としても下校までの時間で書かなければならず、初めはなかなか容易ではありませんでした。いつしか、家庭と学校での様子の記述を通して子ども一人ひとりの状態の理解を深めるためには、このノートは大変重要であると考えようになりました。このことにより普通学級では味わうことができない感覚を磨いていけたように思っています。子どもたちがそれぞれの家庭で家族と共に育っていく中で、学校教育がその成長にどう寄り添うことができるのか、それは学校の論理だけでなく、また、千差万別の各家庭での子育ての在り方だけでもありません。両者の相互理解と尊重、協力の中で行われる営みに他ならないということに思いを至らせることができました。

保護者の方から気づかせていただいたことに教室の安全な環境づくりのための配慮があります。体のバランスがとりづらい子、距離感がつかみづらく転びやすい子、つまずきやすい子、人や物とぶつかりやすい子もいます。教室の広さは子どもの人数からすると広々とした感じでしたし、特に危険なものが子どもの手に届く所にあるわけではありません。しかし、子どもたちが長い時間生活する教室は、動かすことのできない角のある柱やガラス窓に囲まれています。コンクリートで四角く囲まれた教室自体も子どもたちにとって危険となりうるのです。机やいすも、どう配置するのがよいのか考えるようになりました。

文房具も同じです。はさみ、セロハンテープのカッター台、削ってとがった鉛筆、容易に消すことのできない油性ペンなど普通学級では当然のように置いてある物にまで、細心の注意を払う必要がありました。子どもたちの中には言葉を理解することができない子、気持ちを抑えられない子、かまってほしくてわざといたずらをして教師に叱られたい子もいます。この学級の担任となってからは毎朝子どもたちの登校前に、子どもが転んだり、つまずいたりしたときにけがの原因になるようなものはないか、室内が整

理整頓してあるか確認するようになりました。子どもたちがけがをせず、笑顔で家に帰ってほしいという願いからです。

(4) 教師の資格

教師としての自分が確かめられる場面はいたるところにありました。初めての給食はスパゲッティナポリタンでした。子どもたちはみんな大喜びです。きちんと挨拶をしてから食べ始めます。そのときです。私の目の前の1年生の子どもの食べ方は壮絶でした。ぎこちない指の動きで、フォークをグーで握り、たくさんのスパゲッティを口にいれます。そこまでの動きも大変なようで、涙目になりながら、鼻を垂らしています。顔中がケチャップと涙と鼻汁が混ざった状態で黙々と口を動かしているのです。誰にどう見られるかなど、その子にとっては関係のないことのようにです。

この子の様子を目の前にしたとき、私は一瞬食欲が失せました。私は信仰を持つ教師として教育愛と呼ばれるものを本当に持っているのかと、神さまに問われた瞬間でした。しかし、それは一瞬のことでした。「ほらほら、そんなにいっぱい口の中に入れなくて、口の中のスパゲッティがなくなったらフォークで取ろうね。」と顔を拭いてあげながら話す自分がいました。あの日から35年が経ちました。あの子はフォークをきちんと持って食べているだろうか、口についたケチャップを自分でふいているだろうか、スパゲッティを食べるたびに今でも思い出す小さな、しかし私にとっては大きな出来事でした。知らず知らずに私はおごり高ぶっていたのです。それ以来、私に何か特別なものがあって教師をしている、この子どもたちの担任だ、などと思うことはなくなりました。

(5) 小学校の教師とは

これまでの年月は、へき地小規模校での経験を含め、小学校教師の仕事とは何かを考えさせられた時間でした。立ち止まって考えることは現場の教師にとって容易なことではありません。毎日の決まった指導、支援、援

助はおろそかにできません。教師としての実践を通して考えることが必要です。

そのことは、3年間の特別支援学級担任期間中常に考えさせられたことです。教科書の扱いなどもその典型的な一例と言えます。特別支援学級における教科書は、いわゆる検定を受けた通常の教科書と併用して、児童の実態に沿ったその他の書籍を選択し教科書として使用することができました。学年相当の教科書の使用とともに、個々の児童の理解力に従って下学年の教科書を使用することもできました。しかし、保護者の希望と担任の指導経験による教科書の選択が常に一致するというわけではありませんでした。保護者は年齢相当の学年の教科書を進める希望が強く、担任は、着実な理解を踏ませながらわかる、できることを一つずつ増やしていくことを第一に考え下学年の教科書を進める傾向がありました。多くの子どもたちが1年生の教科書は同学年の健常児とともに手にするのですが、習得するために時間が多くかかり、2年生になるころには、教科書の内容理解には困難が生じ始めます。一方、保護者にとっては複雑な思いがあるようでした。5年生の子どもが、2年生程度の学習をしている姿は、内容理解の程度によるとわかってはいても、気持ちはすっきり割り切れるものではないでしょう。そんな保護者の気持ちにどう寄り添っていけばいいのか、答えは見つかりませんでした。

私たちは文字を読むことの指導を大切にしていました。意味などはわからないことも多く、子どもにとって面白くないことであったかもしれませんが、ひらがなさえ読めれば、漢字に振り仮名がついた本を読むことはできるのです。本が音読できるようになることを子どもたちはとても喜びます。子どもたちが大人になったとき、文字にふれ、本を読む楽しさという文化に参加してほしいという願いから指導を続けました。高学年になると漢字をしっかりと読めるようになる子、音読が得意な子も現れてきました。読むことの重要性をこの子どもたちの指導を通して改めて知らされました。

また、数に関する学習の成果はなかなか現れにくいものです。数の世界を広げるため、できるだけ子どもの生活に引き寄せた問題をつくるように心がけました。また、同学年の子どもがいる場合は、一人ひとり課題を変えていました。高学年の場合、不注意に同じ課題を与えると、私はみんなより遅かった、私のほうが間違えた数が少ないなど、容易に競争心につながってしまい、学習する意欲がなくなってしまうます。自分が一番になれない時の悔しさをどう抑えていくかも重要な学習の一つです。些細なことで号泣してしまう子もいます。すぐにはその理由を把握することはできませんでした。しかし、休み時間を含め、登校から下校まで常に一緒に過ごす中で、だんだんとその理由を想像できるようになってきました。そして、悲しむことにはその子なりの理由があることに気づかされました。できる、できないがはっきりしやすい算数などの学習は一人ひとりに応じて丁寧な指導をするようにしました。教師として指導をしているつもりになっている私に、この子どもたちが教えてくれました。

入学してきたA子さんは複合的な障がいを持っていました。一学期は疲れるとカーペットに腹ばいになって長時間過ごします。私たちはそんなA子さんに学ぶことの喜びを味わわせたいと願い、算数の学習目標の一つに、物を数えることを掲げました。教科書だけでなく生活の中の全てを通して意識的に一緒に数えるようにしました。高学年の子どもたちも私たちの意図をくんで、協力してくれました。一学期はまだまだ無理でした。数を唱えることはできるのですが、それが一つ一つの物を数えることとどうしてもつながらないのです。時が過ぎ、二学期の桜の葉も赤く色づいてきたある日、A子さんが遊んでいる中で確実に物を数え始めたのです。1から5までではありましたが、周りの教師も子どもたちも大拍手です。ベテランの講師の目には涙があふれていました。六ヶ月程の時間の中で、ゆっくりとですがA子さんは確実な成長を遂げていました。あきらめないでよかったと思いました。その日から小さなA子さんは私の師となりました。どの子も変われる、どの命も輝いている、命を与え育ててくださるのは神さま

の愛であると、聖書の中で繰り返し語られている言葉が私に迫ってきました。

(6) 遊びと学び

子どもたちにとって遊ぶことも大きな学びの一つです。遊びの中では子どもたちの姿がよく見えてきます。遊びは人とのかかわり合いを身に着けさせる絶好の機会です。また、遊びは自然と「聞く」「話す」ことを学ぶことができる機会でもあります。「今日は何して遊ぶ？」と教師側から投げかけると「〇〇したい」と子どもから返事があります。このたった一つの会話の中にも子どもたちの多種多様な姿が現れます。教師から投げかけられた言葉の意味がわかり、返事が適切にできる子、聞いた言葉をそのままオウム返しにする子もいます。返事ができる子でも、いつも同じ遊びを答える子から自分のしたいことを選んで答える子と様々です。

遊びにはルールがあります。わがままは互いに抑えて順番を待ちます。トランプもよくしました。10までの数字とクローバー、ダイヤなどの数が対応しているので遊びながら数を学ぶ上でも有効な教材でした。ときには失敗も笑って吹き飛ばしながらトランプ遊びを楽しみました。ばばぬきや神経衰弱などは、順番を守らないとゲームになりません。順番を守れない子は注意をして直させればいいのですが、十分な時間をかけ、丁寧な指導が必要だったのは、他の子の不正にこだわり、なぜ私の順番が抜かされてしまったのかと強い不満、悲しみに陥る子でした。そんなときは気持ちを落ち着かせて、ゆっくりと根気よく言いさせます。ここでの根競べが将来のこの子の社会に出てからの自制心につながると考えると、途中で見過ごすわけにはいきません。やがて時がたち、その子も高学年になり、他の子の間違いに気づいても、穏やかに「次は、私の番よ。」と言えるようになった姿を見たときは、感慨深いものがありました。

(7) 養護訓練

普通学級の時間割の中では見られない養護訓練という時間がありまし

た。特に教科書によって内容を決められた指導ではありませんので、子どもたちの障がいの状況に応じて発達の基盤を培う様々な活動が行われました。私が勤務した学校では全員で買い物を行う活動を主として取り組んでいました。

買い物では、学級内でのお楽しみ会に使う品物、調理学習の材料など目的を持たせます。高学年の子どもたちには、そのために何を買うかを自分たちで考え決めさせます。低学年の子どもたちはできる範囲で参加します。品物が決まったらメモに書いて、誰が何を買うかを決め、買い物に行く準備をします。学校から1キロメートルほど離れた所にあるお店まで歩いていきます。途中の道は高低差があり、下りは滑らないように気をつけ、上りは途中で一休みしたくなるほどです。この道を1年生から6年生までみんなまで歩きます。

高学年の子どもたちは何度も歩いた道で慣れているのですが、低学年の子どもはすぐに抱っこをせがんできます。外出できた気持ちの高ぶりからスキップのような歩き方や飛び跳ねるような歩き方をする子もいれば、時々奇声を上げながら歩かないと安心できない様子の子、信号が認識できずにそのまま進んでしまう子もいます。まっすぐ歩くのもやっとという子も外に出かけるうれしさからか、他の子どもたちに励まされながら一歩一歩慎重に足を動かしています。途中のお店に入ろうと握った手に力を込めて意思を表す子もいます。この道を往復することだけでも子どもたちにとって大きな経験であり重要な学習でした。そんな子どもたち一人ひとりに即座に対応しつつ、望ましい歩行の姿となるように教師は声をかけてこだわりや緊張をときほぐし、外出して歩くことの楽しさを体験させます。安全は第一ですから、車が近くを通るたびに教師は緊張が高まります。

お店に入ってから教師の心配をよそに、子どもたちは穏やかになり、楽しげに自分の分担の品物を探し始めます。長年の繰り返しによりお店の中でのマナーは身につけていました。中には、自分の食べたことのあるお菓子を見せようと、つないだ手を引いて連れていこうとする子や、ただた

どしい言葉や発音で知っている品物を一生懸命説明しようとする子もいます。きっと楽しかった思い出とつながっている品物を見つけたのでしょう。できるだけ目を合わせてうなずきながら話を聞きます。私の相槌は的外れのこともあったかもしれません。けれども、できるだけ子どもたちが話そうとしていることを理解しようと努めました。そしてなんとといってもそのお店で働く人々の笑顔と、忍耐、長い間の協力には深い感謝の念を覚えました。事前に買い物訓練の予定を告げ、できるだけお客さんの少ない時間帯を教えていただき日程を調整しました。子どもたちの達成感を味わわせたいとの思いから、接客はごく普通にさせていただきたいとお願いしました。品物とお金を持ち、レジに向かいます。当然一列になって待つ必要があります。その待ち時間も子どもたちの忍耐力を育てる機会です。飽きてきてぐずり出しても、教師は甘やかしません。人生を自立して生きていくとき、待つことは大切です。指導場面と心得て厳しく接するよう心がけました。

継続して実施されてきた買い物学習は、生きていくためにいかに大事な指導場面であるかということがわかってきました。この時の経験は教育に対する私の視野を大いに広げてくれました。思い起こせばそれは大学の卒論作成の時に紹介された、生活綴り方教育と通底するものであると考えられました。子どもたちの生活から離れた教育は、真の教育とは言えないという思いを自らの中に確立できた時間だったのかもしれませんが。生活を共にしながら、共に学び、共に悩みながら生きる現場教師の専門性は決して半端なものではありません。それぞれの障がいに関する医学的な知識が十分にあるわけではありませんが、教師としての子どもたち一人ひとりの状況把握は、決して意味の薄いものではないという確信が持てました。この子どもたちを生かし、命の輝きを与え、必ずどこかで世の光とやらせてくださる神さまへの信仰はこの時期の私の支えでした。繰り返し練習しても、なかなか身につかないこともありました。また初めからやり直すことも少なくありません。教師にとって目に見える進歩が少ないことは、指導意欲も減退しがちになります。しかし、目の前の子もたちと過ごす中で、ど

んなに時間がかかっても、ほんのわずかでも、進歩を見せてくれる子どもたちの姿に出会えた時、私はできない子と決めつけていた愚かさ、自分の教師としてのふがいなさに気づかされ、神さまが与えられた命への尊敬の念を持てるようになりました。この子どもたちの時計はゆっくりと進んでいるのでしょうか。それは神さまが一人ひとりに合わせて与えてくださった時間なのかもしれません。成長させてくださるのは神さまであると信じ、教師はその子その子の歩みと育ちの速度を見極めながら、あせらずあわてずゆっくりと見守ることをいつも心にとどめておかなければならないのかもしれません。

特別支援学級担任としての日々は、成長の輝き、支え合って生きる喜びなどを子どもから教わると同時に、教師としての私の高慢さに気づかせてもらった、かけがえのない時間でした。

(8) 特別支援学級主任就任

そんな特別支援学級担任の職を続ける中で、学級主任を任命され学級運営を任されるようになりました。突然与えられた重責です。幸い勤務していた文京区では担任会という研修会が毎月一度開かれていました。特別支援学級担任が集まり情報や指導方法の交換、特別支援学級独自行事などの打ち合わせなどを行っていました。そこには私が赴任するまで主任として勤務され、区内他校の特別支援学級主任として指導を続けられている先生も参加していました。この方は障がい児教育の専門的な学びをしてこられた方で私のわからないことや悩んでいることなどに対して、常に的確なアドバイスをしてくださいました。また、担任会に参加されている主任の先生は、専門知識も豊富で私にとって心強く頼りになる方々が何人もいらっしゃいました。

担任会以外でも、区立の宿泊施設を使った特別支援学級独自の宿泊行事の折などに、子どもたちの行動の示す意味や子どもたちへの声のかけ方、子どもたちの行動を改善させるための様々な指導法など、多くのことを学

ばせていただき、すぐに取り入れさせていただいたものです。ときには夜遅くまで歓談しながら、特別支援教育の世界の奥深さ、実り豊かなやりがいなど多くのことを教えていただきました。

先生方の話を伺いながら、教師経験も10年を超え、私が最も注意していたつもりであった不要なプライドを持つようになってしまったことに気づきました。教師は教えるプロではなく、教わるプロであることをさらに深く納得させられました。経験を積んだからといって教えることにおごり高ぶってはいけない、プライドなど持つ必要はないことをこの子どもたちから、また、先生方から学ばせていただきました。それはキリスト者の歩みと重なりました。信仰者としての年月が長くなっていくことは、人に誇れることがその分、増していくこととは全く異なるものです。信仰者は神さまへの感謝と畏敬の念、人々への愛と謙遜が日々増し加わることを望むものです。けれども、それらを評価されるのは神さまだけです。教師の仕事は誠実に準備し実践したつもりでいても、振り返れば常に反省ばかりが目につきます。学習者としての子どもは私たち教師を批判はしません。だからこそ学ぶプロ、教わるプロでありたい、教師としての役割が大きく変わっていく感覚を、この特別支援学級主任の時代に得ることができたことを今でも感謝しています。

3. 都内での異動

(1) 異動を考える

3年目を迎え、異動を考える機会がありました。このまま勤務校で特別支援教育の専門性を高めていくことも選択肢の一つです。東京都内のへき地教育に向かうことも考え、祈りました。神さまは次に私をどこに送ろうとされていてらっしゃるのか、問い続けました。私が培ってきた経験、指導技法などが生かせる場所はどこか、そのためには私が最も学ばなければならない場所を考えることが大事だと思うようになりました。その結果、私は普通小学校の教師として歩む道を選択しました。特別支援教育について

は専門的な知識を持って効果的な指導をなさっている先生方に出会えたことで、多くのことを学ぶことができました。その学びを普通小学校で生かすことこそが必要だと考えました。

私は普通の小学校に通う子どもたちの所へ送られることに、最も深い納得感が得られるようになっていきました。学校というものが積極的に好きとは言えなかった私自身の経験が、その選択に影響を及ぼしたのかもしれませんが。分校や特別支援学級では重きを置くことのなかった、学びを点数化し、子どもたちを序列化する学校に戻り、生活を学びの土台とすることにふたたび挑戦し、学校を子どもたちのものにするといった立教で培われた教師としての夢の実現をめざそうと思い立ちました。分校教師、特別支援学級教師の経験を基にして、一人ひとりが大切にされ、学ぶことを楽しみ、友と支え合う喜びを味わえる学校生活を子どもたちのために保障したいと思いました。

(2) 普通学級担任

1986年4月私は豊島区の小学校に着任しました。3年生の担任です。静かな住宅街と活気のある商店街がある地域でした。山手線の駅から近く、商店街は賑やかでした。校舎は三方を住宅に囲まれ、北側は道を隔てて都立の聴覚障がい特別支援学校がありました。教師初任の時に勤務した北区の学校と環境、雰囲気似たところがありました。聴覚障がい特別支援学校との交流も盛んに行われているということで、安心感とともに期待感を持つことができました。神さまはここで私にどんな働きをせよとお考えなのか、楽しみになりました。

学年は3クラス、総勢100名を超える児童数でした。学年主任は経験20年を超える登山が趣味の女性でした。もう一人の女性も経験年数10年ほどで私と同年輩の教師でした。この学年主任の教育に対する姿勢からも多くのことを学ぶことができました。話をするうちに、自らの教育に対する考えをしっかりと持っていて他に迎合することのない方という印象を受

けました。学年経営に関しても同様で、私たち二人の教師の自主性を尊重していただき、相談には乗るけれど口出しはしないといた姿勢を貫かれた方でした。週1回の学年会では、学年として統一して進むといたことを重視するような話はありませんでした。私たちをそれなりの経験を積んだ教師として尊重して下さっていることを感じ、期待に応えたいと思いました。

教師のスタートを切った北区の普通小学校では、学年主任の先生他3名が一致団結して歩んだ記憶が強く残っています。とくに学習進度などは同一歩調を取ることが重視され、週指導計画も学年で制作して管理職に提出するといった方法で進んでいました。私が初任者であること、5、6年担任という性質上、それが得策と考えられた学年主任の先生の考えは、私が主任であってもそうするだろうと後年考えたものです。また、6年間の分校教師、3年間の特別支援学級担任の経験は、指導計画はあくまで目の前の子どもをまず理解することから始めることが重要であると私に気づかせてくれました。子どもを中心に指導計画を考える一方には、教科書を中心に考えることが存在します。教科書を1年かけて終わらせるためには、それぞれの単元学習にどのくらいの時間をかけるかをまず考えます。教師が主体的に各単元の時間配当を検討するならばまだいいのですが、その手間を省くために教科書には準拠した指導書があり、そこには指導の配当時間も掲載されています。指導目標、指導方法など事細かに記載されていることを順に行っていけば、指導したように思ってしまうのです。確かにそこに書かれている内容は標準的な一例であり、初任者や経験の浅い教員にとっては、大きな間違いをせずに済むため有効なものといえます。しかし、それだけでは、自らは考えない教師や子どもを見ようとしない教師が育ってしまいます。

私の経験はある意味、従来の決められた小学校教師の指導の仕方、内容、評価法と真逆な方向を向いて歩んできたと言えるのかもしれませんが。それはキリスト教信仰を持つものとして、子どもたち一人ひとりの違いが神さ

まの望まれる姿であるとの信仰に立脚する視点でした。立教で学んだ、まず子どもを見なさい、子どもの生活から学びを生み出ささいという教育のスピリットです。教科書ありきの視点と子どもありきの視点では困難度が違います。また、前者は経験を積むごとに技術の習得が計られ指導の熟達者になっていけるかもしれません。一方、後者は目に見える技術の上達ではなく、鋭い洞察力とともに、子どもへの謙虚さが増していくのではないかと考えます。

子どもたちの前に一人で立つ小学校の担任として、子どもたち一人ひとりの良さを知りたいという姿勢や言葉は、緊張している子どもたちの気持ちを和ませることができます。クラス 10 人程度の児童数であった分校や特別支援学級の指導と全く同じようにできるわけではありません。そんなつもりはなくても、声のボリュームは今までとは違って多少大きくなっていったかもしれません。異動してきて 1 年目、どんな先生かなと心配する子どもたちの気持ちは当然です。私が最初に気をつけたことは、あの子はこんな子、この子はこんな子というレッテルを張らずに平等に接することでした。できるだけ一人ひとりと接し、よさを引き出したいと祈り続けました。子どもたちは、生活において、学習においての一人ひとりの活躍や長所を見逃さない教師の姿を好意的に受け止めてくれました。朝の時間、休み時間、放課後の時間など通常の学習時間以外での出会いは会話のきっかけとなりました。普段の生活の中で子どもと個別に話す機会が自然と与えられました。

分校での経験を生かして、日記指導も継続して行いました。「かめのこ」と題した 1 枚文集の学びです。日記や作文の中から、私が自筆で書き写したものを学級のみinnで読み合います。その際、子どもの日記、作文から互いに学び合ってほしいと考えたことを書き添えます。特に、苦手意識がある子どもの作文を載せるときには、できるだけ多くのコメントを書き添え、無から有への行いが価値のある素晴らしいことであることを伝え続けました。長い作文だと 1 号に一人、詩などは 1 号に 5、6 人載せて発行し

ました。掲載回数はどの子も均等になるように努めました。1週間に2、3号発行し、次年度持ち上がりで担任をした時には、継続して200号になり、記念号を作成し保護者の方からいただいたお祝いのお便りも掲載しました。

それまでの学級での指導の中で、「国語博士」と呼ばれる子が生まれたり、「僕は脱皮した」と母親に話す子が生まれたり、今までただおとなしく授業を聞いていた子が自ら進んで発表したりする姿が見られるようになりました。学級の中の、テストの点がいい子は偉い、何でもうまくできる子が偉い、できない、わからないことは恥ずかしいことという文化を払拭することに心を配りました。どの子も神さまの喜ばれる子という信仰が常にその土台にありました。

そんな普通学級での時間の中で大切にしてきたことは、へき地教育、特別支援教育に従事しながら養われてきた一人ひとりの子どもを尊重すること、互いの生活を知り合う中で弱さを担い合うことでした。子どもたちはそれぞれの成長を喜び合うことを望んでいると確信するようになりました。学校は真の共生をめざすところです。だからこそ学校教育においてキリスト者の存在意義があるのではないのでしょうか。

この学校、学級の勤務はやりがいのあるものでした。毎日全員の日記を読み、1週間に3回程度発行する「かめのこ」作成には多くの時間が必要でした。でもそのことを苦に思ったことは一度もありません。学年の先生方、応援してくださった保護者の皆様、そして管理職の先生方がいつも温かなまなざしで私の教育実践を見守っていて下さっていたからです。

4. 新たな挑戦への思い ～在外教育施設派遣教員への道～

1987年、この学校での1年目が過ぎ、持ちあがりで4年生の担任となりました。学年の担任の先生方も全員持ち上がりとなりました。学校にも子どもたちにも先生方にも慣れ、私は今まで以上に子どもたち一人ひとりの力を信じ、引き出す指導に心がけました。順調に進んでいく中、私の気

持ちにあるきっかけを通して、大きな挑戦に対する思いがわき上がってきました。海外で学ぶ子どもたちの窮状を知ったのです。日本のような安全な環境の中とは違い、世界には危険と隣り合わせの生活をし、学習に必要な教材も十分にそろわない状況の中で学んでいる子どもたちがいることを知ったのです。そのような中で学ぶ日本の子どもたちの苦勞と忍耐を知るにつけ、もし私が役に立てることがあればという思いが浮かんできました。1学期も中頃、在外教育施設派遣教員の募集の話聞き、応募だけはしてみようと思いましたが。

(1) 派遣教員への意思

その時、家族は妻と小学2年生と3歳の男の子二人でした。次の年も応募することを考えて、2年間の時間の中で神さまの導きをはっきりと受け止めたいと思っていました。派遣教員内定までの道のりは、思っていたよりも遠いものようでした。在職校の校長推薦から始まり、何度かの選考があります。在外教育施設は世界中に存在しますので、派遣先はわかりません。家族のあるものは家族同伴が原則です。私は教師として仕事をすればいいのですが、妻や子どもたちの環境の変化はとても大きなものです。どこの国に派遣されるかは全く分からないのです。治安の問題がある国もあります。それでも、この計画が実施できたのは、私の希望を受け止め、常におおらかに前向きに考えて支えてくれた妻のおかげでした。

(2) 選考

派遣教員のための選考は、東京都の場合は勤務校校長の推薦、区教育委員会での選考、都教育委員会での選考、そして文部省（当時）での最終選考と続きます。選考のための特別な準備はしていませんでしたので、子どもたちとの学校生活は変わりなく過ごしました。生活日記、学習日記を中心とした指導の中で、一人ひとりの子どもたちの良さを見つけ引き出すことがとても楽しく、指導の工夫を毎日続けていました。日記をもとに互い

に学習や生活を見つめ合い、考え合い、表現し合う文集作りには、どうしても時間が必要でしたが、友達作品を微笑みながら読む子どもたちの姿を思い浮かべると、これはとても楽しい作業でした。キリスト者教師として、外国で暮らし困難の中にある子どもたちにも同じことを味わわせたいと思うようになりました。どの選考の段階の面接でも最初に尋ねられたことは、志望動機でした。私はこれまで子どもたちから多くのことを学ばされたことを話しました。困難な生活、学びの状況の中で、子どもたち一人ひとりの良さを見つけ引き出し、学びの楽しさに気づかせたい、そのために日記、作文指導を中心に置き、指導をしたいと答えていました。

学校長、区教育委員会、都教育委員会の推薦をいただき、文部省の選考まで進むことができました。文部省の選考でも、志望動機は「外国において困難な生活を強いられている子どもたちのために働きたい。」と答えました。面接官の方には「キリスト教的な考え方が感じられますね。」とおっしゃっていただきました。

ある日、校長先生に呼ばれ、派遣教員として内定し派遣先が決定されたことを告げられました。ブラジル国、ポルト・アレグレ日本人補習校という名の学校です。日本から最も遠い国ブラジルへの派遣にはびっくりしました。ポルト・アレグレという町も全く聞いたことはありませんでした。校長室の机の上には私の派遣先がわかるように大きな百科事典が開かれていました。百科事典を見ながら、ブラジルの最南端のリオ・グランデ・ド・スール州の州都、人口120万人の大都会であることを知りました。もともと赴任地についての希望は全くなく、困難な中にある子どもたちのために役立ちたいという願いだけでしたので、喜んでお受けすると伝えました。教室に戻るまでの短い時間、私は、これは神さまの導きであり神さまがすべてを備えてくださるという強い思いを持つことができました。

(3) 研修

当時の派遣までのスケジュールは、派遣者選考年度の次の年度に派遣されるというものでした。決定後2週間ほど、派遣教員内定者が筑波の研修センターに集合し集中的な研修を受けることになりました。最初の一週間は全員が派遣教員として知っておくべき概論的な内容の講義が続きしました。日本国内では治安の問題、医療の問題などについてあまり意識して考える機会はなかったのですが、諸外国の現状についての講師の話には皆真剣に耳を傾けていました。二週目に入ると日本人学校への派遣者と補習校への派遣者と別れ、それぞれにとってより実践的な研修へと進みました。小規模補習校への派遣者は派遣された学校では校長として働く必要があることを知らされ、責任の重さに身の引き締まる思いがしました。健康、安全に関しての話も一週目より、さらに具体的になりました。現地での様々な疾病に関しての予防法、薬品、また、安全な生活を送るための諸注意などきめ細かいものでした。

研修過程の終了間際になると各校の勤務経験のある方や、在外公館の勤務経験がある方がいらして、派遣教員との懇談の時間が個別に設けられました。私の場合は、ブラジル北東部にあるレシフェの領事であった方がいらしてくださり、ブラジル全般の事情についてお話を伺いました。治安、言語、経済の問題など緊張しながら説明を拝聴しました。数か月後には世界中の補習校において、一人で仕事をする方々とともに過ごした時間は大変貴重なものでした。さらに後日ポルト・アレグレ総領事館のK領事よりお手紙もいただき、赴任地に対する不安な気持ちも徐々に期待へと変化してきました。

希望者に対して派遣教員の配偶者への研修も東京で行われ、妻もこれに参加しました。在外教育施設派遣教員の意義から始まり、その配偶者としてふさわしい行動について、生活・医療・教育など長期滞在する際の留意点、現地の人々との接し方、現地での公式行事参加のマナー、派遣までの様々な準備の仕方など多岐にわたる研修を受けたようです。妻はこの研修

によって海外派遣の不安が和らいだようでした。

(4) ブラジルへ渡る

① ポルト・アレグレの生活

1988年4月8日、日本を出発する日は前日の春の大雪が残る足元の悪い日でした。妻とこの年3年生になる長男、幼稚園年中になる次男の4人で成田からブラジルに向かう飛行機に乗り込み、いよいよ海外での教員生活が始まりました。

成田出発からトランジットを含め30時間ほどの空の旅を終え、ポルト・アレグレ空港に到着すると、多くの日本人の方々が出迎えてくれました。自己紹介など簡単な挨拶を互いに交わして、すぐに用意して下さったアパートに向かいました。空港周辺は広漠とした印象でしたが、市街地に近づくにつれ車も増え、道幅も広く、大きな街路樹が植えられているきれいな街並みが見えてきました。用意されたアパートも十分な広さで、すぐ近くに町の中でも有数の大きな公園があり、子どもたちも十分に遊ぶことができる恵まれた立地でした。

ここまでは、あわただしく時間が過ぎてゆき、考える余裕もなく自身の心の動きに鈍感になっていました。しかし、広いアパートに家族4人だけと当座の日用必需品の入った十数個の段ボール箱に囲まれた時、大きな不安感が一挙に押し寄せてきました。右も左もわからないブラジルで、妻や子どもたちを守り、たった一人の日本人教師として3年間を過ごすことが本当にできるのだろうか。電話もかけ方がわからず、道行く人々の言葉はポルトガル語。言葉も文字も理解することはまったくできないのです。アパートの住人に日本人は一人もいません。これから先どのようなことがあるのかと、胸が押さえつけられるようで祈らずにはいられませんでした。

気持ちを落ち着かせて、妻と子どもたちと一緒に大きな公園の中を散歩しました。近くにあったスーパーマーケットに入り、ドキドキしながら買い物をするうちに、それまで抱いていた雨雲のような大きな不安感は少し

ずつ消えていきました。この時の散歩と買い物、手をつなぐわが子の手のぬくもりは、神さまの慰めのように思われました。それからの3年間、あの時のような不安を覚えることは一度もありませんでした。

② ポルト・アレグレ日本人補習校

世界中に存在する補習校の姿は大きく分けて二つに分かれます。それはアメリカ合衆国やイギリス、フランスなど、通常、派遣者の子女の多くが現地校に通い現地語で学び、週に一、二度、国語を中心に帰国後困らない程度の学習を行うタイプと、本補習校のように週日に毎日午後を開校しているタイプの二つです。当時ブラジルにはポルト・アレグレとサルバドールに補習校がありましたが、両校ともに週日午後毎日授業のあるタイプでした。

補習校は市の郊外にある日本人会が所有する建物の部屋を間借りして授業を行っていました。この建物は主に土曜日に日系人の子女のための日本語学校として使われていました。週日午後の活用はなく、補習校が独占して使用することができました。1階はいくつかの部屋に仕切られ、2階は広いフリースペースになっています。月曜日から金曜日までの午後、1階の数部屋を使用して補習校の授業が行われていました。2階は入学式や始業式、卒業式などの行事や室内体育の授業の際に使うのにちょうどいいスペースでした。

補習校での指導は、それまで指導を続けていた二人の教師と共に行うことになりました。一人の方は日本で幼稚園教員の資格を持ち、指導の経験のある方でした。ご主人は市内の日本総領事館に勤務されていました。もう一人の方は愛知県のカトリック修道院から派遣されている教育修道尼の方で、普段は当市に隣接する開拓地で農業を営む日系人の子女に日本語を教えておられました。開拓地の中にある住まいにお一人で暮らしていました。この二人の方を中心に、10年余り本補習校の教育が進められていました。設立当初から日本からの教員派遣を要望されていたとのことで、私

が派遣されたことをとても喜んでくださいました。

ポルト・アレグレ日本人補習校の最大の特徴は、派遣者の子女と共に、現地の日系人2世、3世の子女が学んでいることでした。派遣者数がもともと少数であったため、そのような形態になったそうです。派遣者の子女は週5日、年齢に応じた学年の学習を行います。派遣者子女の多くはインターナショナルスクールに通い、学校では英語の生活を送っていました。午前中の学びを終え、午後は補習校で日本語による日本の学校に準じた学習をします。生活はすべてポルトガル語ですから、子どもながらに3カ国語を操る必要があります。補習校の通学は義務ではありませんが、市内に住む派遣者の子女は全員補習校に通っていました。

日系人子女は週3日、主に国語の教科書を使って日本語教育を行います。日系人子女は現地校で学び、午後補習校に通学してきます。当時現地の学校事情は、どの小学校も午前と午後のどちらかを選択して学ぶ二部制でした。派遣者の子女と現地日系人子女は大変仲がよく、みなが兄弟のように見えるほどでした。合わせて20名ほどのこの子どもたちにどれだけ役に立つ指導ができるか、不安でもあり、今まで以上に聖書を読み、祈る時間が多くなっていました。

i) 日系人子女への指導

日系人子女の保護者は祖先の国、日本の文化、中でも日本語を子どもたちに学んでほしいという強い思いを持っていました。自分の子どもとの会話は問題ないとしても、将来孫の代になった時コミュニケーションが取れなくなるのではないかと心配されていました。

私は、着任した年は子どもたちの学習レベルが上がり、指導が困難になってきたということで、週三日の日本語上級クラスの指導を依頼されました。残りの二日は派遣者子女の指導を担当しました。上級クラスに通う子どもたちは、全員日系二世で小学生と中学生合わせて女子3名、男子2名の総勢5人でした。保護者は日本育ちの方で、家庭でも日本語教育を行うこと

ができる方々でした。5人とも日本語を使った会話での意思疎通に問題はありませんでした。

このような特殊な補習校であることは、派遣先が決定してから補習校の理事長との手紙のやり取りで赴任前から理解はしていました。しかし、私自身日本語指導の専門家ではありません。どうすればいいのか十分な準備のないまま着任することになりました。私なりに保護者の皆様の熱い思いはしっかりと受け止めて教育内容を検討しました。

次第に保護者は日本語の教科書を進めることが一番の望みであることがわかり、土台は教科書に置くことにしました。当時も外国で日本語を学ぶ人々に対するテキストはありましたが、それらは日系二世の子どもたちには簡単すぎるレベルでした。日本の教科書で学ぶのであれば私の経験が役立つかもしれないと考え、準備に拍車がかかりました。外国で学ぶ子どもたちにとって、何年生の国語の教科書まで学習したということは、それだけでどの程度の日本語が理解できるのかというバロメーターにもなるのだということに、初めて気づかされました。国語の教科書は物語、説明文、作文、聞き方・話し方などがどの学年にもまんべんなく取り上げられています。しかも内容が易から難へと順序づけられていること、漢字も、系統立てて配列されていることなど、外国で学ぶ日系の子どもたちには最適のテキストであると思えてきました。文化の違いから、日本ではよく使う言葉でも意味が分からないということもありましたが、一人ひとりのわからないを共有し互いに学び合いながら解決していきました。分校教師の時、教科書の順をそのまま行うのではなく、子どもたちの必要性や、学びの一貫性を考えて単元を入れ替えていた感覚がこの時にとっても役立ちました。

日本語上級クラスでは、時間がたつにつれ、教科書の学習だけでは興味関心を引くことは難しいと思うようになり、子どもたちが好きな日本の歌を教材にすることを試みました。ブラジルで生まれ育った子どもたちは音楽がみな大好きです。ブラジルの歌ばかりでなく、父母の影響からか日本の歌もみなよく知っています。歌詞は暗記するほど身につけていても、そ

の意味がすべて理解できているわけではありません。ある時は、私が持参した日本の歌のカセットテープを聞かせて、日本語で歌詞を書き取り、意味を考えるとといった学習も行いました。知っている者にとっては何でもないことでも、少し早口の歌い方だったり、知らない言葉であったりすると書き取ることは容易ではありません。何度か聞かせ、私がゆっくり語り、子どもたちは完成させていきます。日本から2万 km 離れたブラジルで、日本の歌を通して学ぶ学習にどの子も意欲的に取り組んでいました。

ii) 派遣者子女の指導

派遣者子女に対しては年齢相当の学年の教科書を主教材として使用しました。中にはブラジル生まれの子も在籍しており、ポルトガル語を流ちょうに話します。しかしながら日本には里帰りして度々帰ったことがある程度の子どもですから、日系二世の子どもたちと経験に関しては大きな違いはありません。家庭では日本語で育てていらしたので年齢相応の会話は可能でした。しかし、日本語のイントネーションやあいづちなど、ポルトガル語会話の影響が感じられました。全ての子どもたちが日本に帰国する前提でしたので、一人ひとりの状況を細かく見きわめることの大切さを改めて考えさせられました。子どもたちは3年間の間に3人から徐々に9人に増えました。1年生から5年生までの小学生と中学生です。少人数のため学習状況の把握はよくできました。月曜日から金曜日まで、午後2時30分から始まり6時に終了する毎日でした。

a) 国語

指導は私と日本で幼稚園指導の経験のある K 先生と二人で行っていました。1、2年生の指導を K 先生が担当し、私が3年生以上を担当しました。授業は一つの教室で複数の学年が学ぶ複式授業となります。どちらかの学年が先に音読して学習を始める時には、他の学年の子どもは漢字の学習や辞書を使つての調べ学習、準備しておいたプリントを使つての自習をし

す。音読は重視し毎日行いました。3年生後半から国語の内容も徐々に高度になり、ブラジルの生活の中では聞いたことのない言葉も登場してきます。そのような言葉に出会うと子どもたちは何とか自己流に発音だけはあるのですが、日本に長く生活していた人が聞くとやはり微妙なずれを感じます。

分校教師の経験からわかったのは、4年生となった子どもたちは大概のことは自分たちでできるということでした。子どもたちは複式授業の学習にもすっかり慣れて、課題を明確にすれば友だちと相談しながら学習を進めていきました。けれども、これまで以上に国語の音読だけは注意深く聞いて指導を続けました。書くことでは、日記指導に重きを置きました。毎日の宿題というより、書ける時に書くといった緩やかなスタートにしました。午前中はそれぞれインターナショナルスクール、現地校で学び、お昼を済ませてから午後は補習校へ通い6時まで学ぶ子どもたちです。午前中の学校の宿題も、補習校の宿題もこなさなければなりません。続けられるか不安もあったのですが、少しずつ日記や作文を書くことに意欲が見られるようになってきました。毎日二つの学校で生活する子どもたちは様々な経験をしています。書くことはいくらでもありました。子どもたちの日記や作文を「ブラジル版かめのこ」と題し1枚プリントにして印刷し、それを教材に互いに読み合いました。互いの生活を知り合うことにより子ども同士のきずなも深まっていきました。生活から学ぶ楽しさを通して、書き方を学び合い、国語を学ぶ楽しさにつながっていきました。

やがて転入生も加わり、3学年の複式授業を行う状況になりました。その際には、他学年の指導をしている時は、国語教材を私が範読したものをカセットテープに録音し、子どもがイヤホンで聴きながら学ぶ方法を取り入れました。決められた時間内で、教師が一つの学年の子どもに接する時間は複式の場合限られますが、下学年の子どもにとっては上学年の子どもの学習を驚くほどよく覚えていることに気づかされました。おぼろげながら子どもたちは、今取り組んでいる学習から発展していく次の学年の学習

の概要を、先取りできているとも言えるようです。子どもたちの隠れた能力の高さには驚かされます。静かに物音一つ立てないことが学習にとって望ましい環境であると、一概には言えないのかもしれませんが。このことは特別支援学級担任の時にも感じていたことでした。特別支援学級での3年間では、1年生から6年生までの子どもたちが在籍していた時期があります。そのような状態でも子どもたちは自分の課題に集中して向かうことは可能でした。こうしてブラジルにおいても子どもの姿から気づかされ、学ぶことが数多くありました。

b) 毛筆書写指導

文字への関心を深めさせるために、毛筆習字の時間も始めました。毎週1時間というわけにはいきませんが、子どもたちは全員習字セットを日本から持ってきていたので国語指導につけ加えることにしました。ただ、ここで問題が発覚しました。毛筆習字は筆、墨、硯、あとは水さえあれば準備できるのですが、問題は紙です。習字用の半紙はポルト・アレグレでは準備できません。教材は日本に依頼してから到着するまで船便で2、3か月かかりました。そこで市内の文房具店で普通に購入できる紙の中から選んでみようと思い、午前中の時間を使って市内の文房具店で紙探しを始めました。その頃になると普通に買い物もできるようになっていたのも、容易に見つかるだろうと高をくくっていたのですが、なかなかこれはという紙に出合えません。市内で一番大きな店にもありませんでした。ようやく住居の近くの文房具店で習字練習用に使いそうな紙を見つけることができました。ブラジルではパペウ・ジ・フロールと呼ばれていた紙でした。それは専門的な用途に使用する紙のようで、A0サイズで販売していました。一人用にするには当然切らなければなりません。この紙に出合い、授業で習字ができるようになることを考えると苦労だとは思いませんでした。和紙とは違い、にじみなどはうまく表せませんが、少し大きさが不ぞろいに切られた手製の習字用紙で筆を運ぶ子どもたちが、帰国後日本の学校で

習字を学んだ時に、ブラジルでの習字の学びがよい思い出になってくれることを願いながら指導に取り組みました。

c) 算数

算数は万国共通のイメージがありますが、筆算の形式はすべての国が日本と同じというわけではありません。午前中インターナショナルスクールで学ぶ子どもたちはアメリカ式、現地校で学ぶ子どもたちはブラジル式、そして補習校で学ぶ日本式と三つの異なる形式が混在することもあります。しかし子どもたちはたくましくそれぞれの形式の違いに興味を持ちながら、補習校では日本式の筆算を学んでいきました。小学校算数は身近な生活から話題を引き出し問題化して、数学の論理で解決していく学びです。そのため提示された文章題の読み取りによって演算決定を行い解決へと進むことが、日本語使用が家庭内だけに限られる外国生活の子どもたちにとっては簡単ではないのです。ちょっとした言葉に引っかかり先に進めないこともありましたが、中学年以上の場合は教師があまり口を出すことを控えました。日本で行っていたように、子どもたち同士で自由に疑問を出し合い学び合っていくことを進めていきました。

子どもの分かり方は時として教師、大人の分かり方とは異なることがあることをこれまでに数多く経験してきました。教師の説明に対して、子どもはわからないことを恥ずかしがったり、子どもなりのプライドがあったりしてわかったようにふるまいがちです。けれども子どもは互いに弱さを支え合う心を持っています。子どもはつたないながらも、同じ世代の子どもからの説明が一番理解しやすいことを、ここでも学ぶことができました。日本から遠く離れた場所、異なる文化の中に住み育ってきた子どもたちだからこそ、競争しようというよりも助け合おうと思う心のほうが先に働くようです。

生活に根差した算数を心がけて教材を常に探していました。大きな数の学習の際には、お米の粒を、十ずつ、百ずつまとめながら数えさせました。

10,000 まで数えたお米を自宅で炊いていきました。お茶碗によそってみると軽く 5 杯分ありました。子どもたちは「お茶碗 1 杯は、お米約 2,000 粒なんだね。」と確かめ合ったことを、大人になってもきっと覚えていてくれるでしょう。

d) 社会科・理科と単元創造

社会科や理科は午前中学んでいるそれぞれの学校の扱い方を調べて活用したり、絵本や図鑑、資料集などを駆使して学びを補完するようにしました。

社会科の学習では、教科書を中心としながら、自分たちの生活を振り返りたくさんの人々に支えられて成り立っていることに気づかせるとともに、常に今住んでいるポルト・アレグレ市やブラジルの様子と比較するようにしながら学びを進めていきました。

理科の学習では教科書や資料集、補習校でも比較的学びやすい植物や昆虫の学習を柱に据えました。一人一鉢栽培活動としてアマリリスの球根を育て、建物のロビーに飾り、出入りする方たちに喜ばれました。建物の脇にある駐車場は、自然のままの姿だったので、子どもたちと耕してジャガイモを植えて観察をし、収穫しました。また、そこに生える草花や小さな虫などに興味を持たせるような活動も取り入れました。遠足では、市の中心から少し離れた所にある動物園や、植物園に出かけて子どもたちの興味、関心が広がるように計画しました。補習校には各学年の教科書で扱う実験道具がすべて備えられているわけではありません。調べてみると日本に各学年で扱う実験用道具のセットがあることを知り、早速購入し送ってもらい使用しました。これで各学年の主要な実験をすることができました。

社会科も理科も教科書の単元を残らず扱うことはできませんので、現地の学校での学び、町で働く人々、公共的な施設、ポルト・アレグレ市の地理や自然、補習校内の自然などを活用し関心を深めていくように心がけました。これらの指導の仕方は私にとっては、さして目新しいことではあり

ませんでした。子どもたちの学ぶ意欲を高めるため、分校教師時代も分校近郊の川や池などの自然環境や保護者の農業生活、また、学区内にある酪農のための育成牧場などの中から、様々な教科で学習単元を立ち上げることはごく普通のことでした。また、特別支援学級における指導は一人ひとり子どもたちの状況に応じた学習をどう創造していくか、指導力が養われる現場でした。教育現場はどこでも、子どもたちへの祈りが必要です。私は、キリスト者教師として困難な状況の子どもたちとかかわりたいという思い、また、立教大学での学びを通して既成の指導カリキュラムがどこかに存在し、その指導を効率よくこなしていくことが教育という営みではないということを、強く思っていました。一人ひとりの子どもたちの命は神さまによって与えられたものであり、世の光、地の塩として一人ひとりに与えられた特別な使命を全うするためのものであると信じています。教師としての営みは、子どもから学び、一人ひとりへの祈りに到達するものだと思っているからです。

e) 体育

体育は週3日コースの日系人子女が登校する日に行いました。建物の脇にある駐車場がグラウンドに代わり、みんなでラジオ体操をしたり、全員でドッジボールをしたり、チームに分かれてリレーや様々な運動をしました。外で運動できない時には、2階の広いフリースペースのいすを全部片付けて即席の体育館を作ります。子どもたちの想像力に助けられ、せまいグラウンドでも即席の体育館でも楽しく体を動かし、心を開放する時間が生まれました。分校で出会った分校主任の先生が常に目指していたすべての子どもが楽しめる体育の指導、少人数での体育の指導経験、特別支援学級での体育の時間の工夫など、多くのことが役立ちました。ここでも神さまの導きを覚え、感謝の思いがわいたものです。

f) 家庭科

最高学年の二人の子どもが5年生になった年には、家庭科の授業も行いました。家庭での生活や自分の役割、衛生的な生活の仕方などの学習も、日本の子どもたちに指導するよりも興味深く学んでいました。ブラジルでは中流階級以上の家庭では家政婦を雇うことが半ば常識のようになっています。仕事を与え、貧しい家庭の家計を助けることは、それなりの収入がある人々には当たり前のことでした。補習校に通う派遣者の家庭も、日系人子女の家庭もほとんどが家政婦を雇っていました。ですから、家族が家全体の掃除や洗濯をしている姿を子どもは目にすることはあまりありませんでした。

運針の練習は日本の学校の家庭科でも長く取り組んでいる活動です。練習用の白い布には赤い点線などが記されていて、子どもたちはその線を頼りに針を進める練習を重ねます。そのような布も手に入れるわけにはいきません。妻にさらし布に赤いボールペンで記した運針練習用の布を作ってもらいました。子どもたちにそれを渡し、並みぬい、本返しぬい、半返しぬい、玉止め、まつりぬいなど基本的な運針の練習をさせました。二人とも男子でしたが、この時間を大変喜んで待ち遠しく思ってくれていました。

g) 中学生の受け入れ

補習校では3日コースは中学生も受け入れていましたが、5日コースの派遣者子女は原則として小学生を対象に指導することにしていました。中学生の学習指導まではなかなか難しい現状があったことと、派遣者子女も中学生になるとその後の進路を考えるため帰国する機会が多く必要性が低かったことが主な原因です。ただし、補習校の性格を理解し、本人が学ぶ意思がある中学生子女の入学希望を断ることはしませんでした。私が赴任していた間に、一人だけ中学生女子生徒の入学希望がありました。南米コロンビアからポルト・アレグレに移り住んできた外国生活の長い派遣者の子女でした。インターナショナルスクールの学校生活のことや、補習校で

指導できる教員が私だけであることなど、総合的に判断し、週1、2日程度国語教科書による日本語を中心とした学習を特別に準備しました。

中学生は一人ということもあり、他の子どもたちとの関係を多少心配したのですが、全くの杞憂でした。たいへん明るい性格で、面倒見もよく、小学生たちともすぐに仲良くなり、学習していくことができました。日本語が自由に話せる空間がとてうれしかったようでした。小学生の子どもたちもいいお姉さんができたということで会話も弾み、一緒に駐車場で昆虫や草花の観察をしたりする中で、互いに教えられたり、教えたりする関係が生まれ、補習校全体の学びに対する雰囲気がさらに温かく和らいだものになってきました。このことはへき地小規模校で1年生から4年生までの全員合奏に取り組んだ時感じたことです。また、一人ひとりの不得意が全く異なる特別支援学級で指導していた時にも感じたことでした。子どもたちの心は開かれている、学びは多様性の中から生まれ、豊かになると感じていました。

h) 土曜特別授業

ポルト・アレグレでの生活にも慣れてきたころ、土曜日の特別授業に取り組みました。子どもたちが補習校では学びにくい音楽、図工などの学習を、私の自宅で行うことにしました。自宅のリビングは広さもあり、日本から持参したピアノも置いてありました。子どもたちに表現活動と当番活動の経験を広げることを目標としました。補習校にも打楽器や絵の具、粘土などはあり低学年が自分の机の上で絵を描いたり、粘土遊びをしたりすることはできました。しかし、高学年では準備や後片付けを考えると補習校で扱うことは難しいものでした。土曜日の授業は高学年を私が担当し、低学年を小学校教師の経験のある妻が担当しました。

図工の授業では、高学年は水彩絵の具で水のにじみを利用して立体感のある人物の描き方などを工夫させました。低学年の授業では「ガリバーと遊ぼう」と題して、リビングいっぱい新聞紙で大きな人型を作り、その

上に子どもたちみんなで寝転んだり、段ボールでこまやけん玉を作ったりして遊びを取り入れた楽しい学習を心がけました。また、運動会や遠足、芋ほりなどの校外学習の思い出をクレヨンや絵の具で描きました。これらの絵は日系人の作品展に出品し、全員が優秀な成績で入賞しました。インターナショナルスクールでも、現地校でも絵を描くことはあっても、日本の図工教育のような幅広い題材に取り組む学習はあまり行われていないようで、子どもたち全員が大変喜んで活動していました。

音楽の授業では、高学年は個別のリコーダー指導を中心にアンサンブルの楽しさも味わわせました。低学年は教科書を中心に楽しい曲を選んで歌いました。また、カスタネットやタンバリン、木琴を補習校から運び、鍵盤ハーモニカと合奏をする楽しみも体験させました。

3年目最後の年には、図工と音楽の間におやつタイムを設けて、当番活動を取り入れることにしました。妻にエプロン、三角巾、ランチョンマットを縫ってもらい、高学年1名と、低学年1名の二人組にして帰国後学校給食に戸惑わないように、おやつを配る体験をさせました。手作りのクッキーやパウンドケーキなどと飲み物を用意して、当番の二人は手を洗って待つ子どもたちに、トレーに乗せたおやつと飲み物を銘々のランチョンマットに丁寧に配っていきます。こんな小さな活動でも、日本で学校生活の体験をしていない子どもたちには楽しかったようです。保護者が迎えに来るまでの待ち時間には、わらべ歌や手遊び歌、「はないちもんめ」など日本的な遊びを取り入れるようにしました。

iii) 補習校校長

そんな小学校教師として、また、日本語教師として補習校で直接指導をしながら、補習校を代表する校長としての仕事を同時に行いました。日本人学校も日本人補習校もその地の在外公館と密接な関係を保ちながら運営されている私立学校の一つです。外国で暮らす人々にとって、邦人保護を第一の役割とする在外公館はとても心強い存在です。補習校はブラジルに

おいては正式な学校とは認められていません。しかし、その中で安心して学ぶことができ、日本からの必要な学用品も自由に輸入できる背景には、当地の領事館の理解と多くの支援がありました。ポルト・アレグレ総領事館に学校の現況、課題などを教育担当の K 領事に報告することが校長の重要な仕事でした。1 年目の生活基盤づくりのために K 領事には、住まいの転居や必需品としての車購入の際など、多くの手助けをいただきました。2 週間に 1 回ほど授業のない午前中に総領事館に伺って行く現況報告のほか、重要な案件がある場合はその都度出向いて相談をさせていただきました。領事館主催の行事にも補習校校長として招待され、多くの日系人やブラジルの人々と出会う機会が与えられ、自由な雰囲気の中、様々な経験を積ませていただきました。中でも貴重な体験だったのは、ポルト・アレグレ市で開催された日本語スピーチ大会の審査員として招待されたことです。

年に 1 回の大会はブラジル社会に日本文化への親しみを持っていただくことを趣旨とし、日系人以外の人々が日本語を学び、その学習成果を披露する場として設けられたものでした。会場は補習校が間借りしている日本人会の建物で行われたり、市内の大学の講堂で行われたりしました。日本国内では特段意識せずにいる日本語を、日本から最も遠い場所で真剣に学び、表現する人々の姿には感動を覚え、感謝の気持ちがわき上がりました。同時に、神さまが私たちに言葉をくださったことの大きな恵みに感謝しました。国語、日本語の指導は母国語だからといって漫然と行ってはいけないことを、もう一度考えることができた経験でした。

校長としての仕事は補習校内の校務、人事、渉外すべてにわたる課題解決と決定にあります。日々の補習校での子どもたちの学習が円滑に進んでいくように準備、実施をし、問題点や課題の確認を行っていきます。職員会議は毎週行い、職員同士の意思の疎通が十分できるようにしました。一人ひとりの学習状況を振り返り、次週の予定を確認することを中心に、教材の提案、指導法の紹介などを行いました。また、学期中の大きな行事な

どの予定や分担、連絡方法などの確認、外部諸団体との連携、領事館への報告事項などについて話し合っていました。それまで準備されていなかった学校要覧も、これまで私が経験した学校のをひな型にして作成しました。文字に起こしていくと補習校が設立から現在までにたどってきた道、多くの人々の熱い思い、困難を乗り越えてきた人々への感謝の念が一段と深くなりました。私の着任後、3家族が新たにポルト・アレグレに派遣されて来られましたが、学校要覧によって補習校の概要を即座に理解していただくことができました。2年目に入り、派遣者子女の最上級生2名が4年生になることから私が5日間指導することが必要と判断し、1名教師を採用しました。この方は日本のある宗教の宣教師としてポルト・アレグレに来られた男性で、5名の日系二世の上級クラス担当をお願いしました。

iv) 入学式・卒業式

現地校では入学式、卒業式のような行事はありません。学校が始まる日は指定された教室で先生を待ち、授業が始まるといった様子で、普段と特別変わったことはありません。卒業式も授業の最後の日という意味で儀式などはありません。補習校でも私が着任する前は現地校同様に入学式、卒業式などはしていませんでした。そこで、小さな学校であっても日本文化に基づく一般的な学校の行事を大切にしたいという思いから入学式、卒業式を行いました。

現地校の多くは、クリスマス休暇から引き続く夏休みが終了する2月下旬から3月初めが年度の開始となります。補習校は日本の学校における年度とあわせて、4月開始の3月終了とし、4月の初旬に入学式を行い、3月下旬に卒業式を行うことにしました。小規模校であり、派遣者の子女が入学の年齢の子どもである可能性は低いのですが、3年間の赴任期間のうち、2回の入学式を行う機会がありました。また、卒業式は、日系人子女のクラスを卒業する子どもたちのために行いました。

入学式や卒業式は2階のホールで行います。入学式にはお祝いの手作りメダルを子どもたちが作り、一人ひとりに贈ります。私の校長式辞の後、お招きしたK領事から祝辞をいただき、その後全員で記念写真を撮りました。ブラジルで育った子どもたちにとっては、初めて体験するこれらの行事に大変興味を示していました。入学式の後には在校生による歓迎会を開きました。派遣者子女の上級生二人が手作りのお面をつけて落語の「寿限無」を演じました。皆拍手喝采で大笑いしました。

卒業式の時には、手作りの「卒業おめでとう」と書かれたリボンをつけて担任を先頭に入場しました。一人ひとりに卒業証書を手渡した後、「君が代」や「ほたるのひかり」、「あおげばとうし」などの曲を全員で歌いました。当日は自宅のピアノで演奏した妻の伴奏をカセットテープに録音したものを会場で流しました。久しく日本を離れている日系人子女の保護者の方々は懐かしい曲に感慨深いものがあったようでした。これらの体験を通して、子どもたちに日本の学校文化に対する理解が深まることを願いました。

v) 運動会

補習校の子どもたちが毎年楽しみにしている行事は遠足と運動会でした。遠足は市内にある植物園と動物園によく行きました。子どもたちだけでなく家族も同伴で、ピクニックのような雰囲気の中で一日を楽しく過ごします。

運動会はポルト・アレグレ市を中心に近隣の日系人全員が集う一大イベントです。場所は郊外の空き地、市内からは車で小一時間かかる所です。背の低い草が生えている平坦な場所です。そこにロープが張られコースができ一日運動会ができる場所が出来上がります。ポルト・アレグレ市内に住む日系人と開拓した村で農業を営む日系人、そして派遣社員の日本人とが年に一度集います。大人の競技もいくつかありますが、やはり運動会の主役は子どもたちです。幼稚園児から小学生、中学生、高校生ぐらい

までの子どもたちが走ったり、リレーをしたり、ダンスをしたりして一日楽しめます。高齢者の方も自前のパイプ椅子を用意して、躍動する子どもたちの競技に限りない声援を送ります。時間も参加者もその場になって決めてゆくような、和気あいあいの雰囲気の中で行われていました。フィールドの中心にはポールを立て、そこにブラジル国旗と日の丸の旗を掲揚しそれぞれの国に感謝と敬意を表します。今は笑顔で過ごされている日系人の方々の苦難と喜びの深さが伝わってくる光景でした。旧約聖書が伝える人々の苦難と喜びが、現実感をもって迫ってきました。

昼近くになるとあちこちで牛肉を焼くにおいがしてきます。ブラジル南部の名物シュラスコの始まりです。マテ茶を片手に全員が大きな家族であるかのような温かな空間が出来上がります。補習校の子どもたち、とくにポルト・アレグレ市中心部に住む子どもたちにとっては久しぶりに見る多くの日本人です。普段の限られた空間から解き放たれてみな元気満開でこの日を過ごします。私たち日本人補習校の子どもたちも、農業地域の子どもたちもそれぞれの学校でおなじダンスを練習してきて、この日にみんなで踊ります。大人数になったダンスの輪は遠く離れたブラジルで過ごす子どもたちにとって日本を感じる大事なものとなったことでしょう。また、日系一世の方々にとっては、後を継ぐ子どもたちの健やかな成長を目の当たりにする大きな喜びの時間でした。大きな青空の下の笑顔、声援、高らかな笑い声をたっぷり浴びながら子どもたちは一日を過ごしていました。

③ 家庭礼拝

三年間のブラジル生活の中で私たちを支えてくれたのは、日曜日に行っていた家庭礼拝でした。

あわただしく一日一日が過ぎていく中、家族で日曜日に教会に行くことができないもどかしさを感じていました。町には大きなカトリック教会がいくつもありましたが、私たちはポルトガル語の説教を理解するまでには至っていません。また、日系人のための教会も市内にはありませんでした。

幼い子どもたちのために聖書を学ぶ機会を与えてくださいと、祈り続けていました。様々な思いをめぐらす中で、教会学校で使用していた教案誌とワークブックを思い出しました。すぐに日本の出版社に連絡し、定期的に届けてもらうことが可能となりました。教案誌は3年間で聖書全巻の中から重要箇所が学べるように構成されていました。ワークブックは幼稚科用、小学校低・高学年用の分冊があり、聖書の学びと連動した工作、ぬり絵、パズルなどが用意されていました。これでようやく日曜日の家庭礼拝の準備が整いました。日本で通っていた教会学校と同じ日曜日の9時から、家族4人だけの礼拝の始まりです。子ども讃美歌の中から、一人ひとり好きな讃美歌を選んで4人で歌います。始まりの祈りをしてから、私が教案誌のカリキュラムに沿いながら聖書のお話をします。そのあとはワークブックを使用しての活動です。子どもたちはこれがとても気に入ったようで、熱心に取り組みました。このワークブックのタイトルは「成長」という名でしたので、子どもたちは日曜日のこの時間を「せいちょうの時間」と呼び、土曜日になると待ち遠しいのか「あしたは、せいちょうの日だね。」というほどになりました。最後はみんなで賛美歌を歌いながらテーブルの周りを1、2周して席に着き、お祈りをして終了です。その後、この日だけは日本から送られてきたお菓子が出され、特別なおやつの時間となります。教会学校のようにたくさんの友達と賛美したり、学んだり、お祈りしたりはできませんでしたが、4人だけの家庭礼拝は神さまの温かな思いを一人ひとりが味わえる時間となりました。

町には日本語の礼拝が行われる教会はありませんでしたが、月に一、二度、サンパウロのルーテル教会に来られている宣教師の方が市内の信徒さんの家に来て聖書のお話をしてくださると教えていただきました。夜の時間でしたので私だけ参加しました。また、3年目になり町の様子、ポルトガル語もわかるようになってきた頃、住まいの近くにバプテスト教会があり、日曜の午後、月に一、二度英語での礼拝があることを知り参加するようになりました。ただ、ポルトガル語よりは理解できるものの、子どもたちに

は難しいようでした。多くの方々と日本語で賛美し、日本語で聖書の話が聞けることの恵みをこの時ほど感じたことはありません。当たり前のように毎週教会に行っていたこと自体が大きな恵みであったことを知らされました。ですから「せいちょうの時間」を4人で大切に、帰国するまで継続しました。日本から最も遠い国で様々な境遇、環境の中で弱い者同士の連帯を土台にして、笑顔で暮らす子どもたちのために教師として働く喜びと、困難な状況にも必ず解決を与えてくださる神さまへの深い信頼を保ち続けられた源泉がここにありました。子どもたちのために始めた時間は、いつしか私と妻にとっての恵みと安らぎの時間となっていました。

(5) ブラジルから再び日本に

ポルト・アレグレでの3年間の任務を終了し帰国することとなりました。3年間で私はどれだけのことができたのだろうと考えると、取り立てて何もないように思いました。それに比べて私が学ばせてもらえたことは、子どもたちの力に驚かされたこと、学びは子どもたちから生まれること、子どもたちは学ぶことが本来大好きであること、そして子どもたちは学びで互いにつながれることなど、数えきれません。勤務した分校よりも小さな学校、午後6時まで毎日学ぶ学校、危険なことや不便なことも多い中で目を輝かせて学ぶ子どもたちの姿に出会えた3年間は、私にとって豊かな研修の期間であり、新たなステップのために神さまが用意してくださったものであるという思いを強くしながら帰国の途につきました。

(立教小学校校長・JICE 所員)